特集

撮影　山頭範之

photographs by Noriyuki Yamagashira

西海の浦々を往く

西彼杵半島の大部分を占める西海市は、
長崎市と佐世保市の中間に位置する。
海況が異なる二つの海に面し、
濃い緑の山地が広がる自然豊かな地。

角力灘から大村湾へ、
地図を頼りに海沿いをぐるり巡ってみると、
〝浦〟が付く地名が多いことに気づくだろう。
海と山のわずかな狭間に安住の地を求めた営みの跡、
そして現代の暮らしが見えてくる。
柔らかな陽光に照らされた入り江へ、
小さな物語を探す旅に出かけた。

海のシルクロード
横瀬浦

ポルトガル人たちは、
八ノ子島を「聖ペドロの島」と呼び、
横瀬浦の港を
「お助けの聖母の港」と
尊んだという。

西海市西海町横瀬浦は車で行こうとすると不便なまちだ。
そのため「陸の孤島」ともいわれるが、
ひとたび海に目を向けると、どこまでも自由に開けたまちとなる。
人々は大海原を自在に行き来し、
海から入ってくるものたちをおおらかに受け入れた。
横瀬浦の歴史と暮らし方に未来の地域創生の示唆を見る
原哲弘さんを訪ねた。

文、龍山久美子
text by Kumiko Tatsuyama

雪浦ウィーク

25年目の挑戦

まちづくりは
一朝一夕にはできない
続けることで
見えてきたこと

文、川良真理
text by Mari Kawara

雪浦ウィーク初日、
雪浦小学校の子どもたちによって行われた街かどライブ。
歌、リコーダー、ケーナのピュアな音色に
たくさんの人が足を止めて聞き入った。

西彼杵半島の西側は、板浦、樫浦、神浦と「浦」の付く地名がタテに並ぶ。海上交通が中心だった時代、岩場の多いリアス海岸のなかにありながらひときわ白い雪のようなその白浜は、船からの目印ともなった。それが、雪浦。白浜に立ち並ぶ防風林の松に守られた、おだやかな集落だ。結晶片岩の平たい石を積み上げた石垣の隙間から茎をのばす野の花、清らかな川。上空のトンビの鳴き声が聞こえるほどの静かなこのまちが、年に一度多くの人々であふれる数日間がある。五月のゴールデンウィークに開催される雪浦ウィークだ。

毎年恒例の雪浦名物も、なんと二十五周年。節目の今年、新世代の会長が就任した。久保桂奈さん、雪のように白いネルのかっぽう着が良く似合う。実家の川添酢造の広報業務だけでなく、近年はNHKのEテレをはじめ地元テレビ番組にもレギュラー出演、そのうえ三人の男の子のお母さんでもある。

「今年はお天気にも恵まれ、たくさんの方にお越しいただきました」と表情も和らぐ。

無理をしないこと
独自の色を持つこと

そもそも、雪浦ウィークの始まりはどんなきっかけだったのだろう。どうして二十五年間も継続できたのだろう。その答えを聞きに、雪浦川沿いに建つゲストハウス森田屋へ足を運ぶ。こちらのオーナーが、雪浦ウィークの発起人の一人、渡辺督郎さんである。

「第一回は一九九九年ですが、その前史があって。青年海外協力隊で行ったソロモン諸島から雪浦に帰って来た私は、ここで何か面白いことをやりたいな、と友人の陶芸家に声をかけました。雪浦を拠点に活動してみないかと。それを受けてこの地に移住してきた彼が窯開きをしたら、思った以上に大勢が雪浦まで遊びに来てくれました。窯開きって十日間前後やるんですよ。だから自分の都合のいい日に遊びに行ける。こちらが動かなくても皆さんお土産

地域に伝わる
郷土料理①

ハレの日を祝う
亀浦の寿司

家族が集まる祝いの日には砂糖たっぷりの寿司がつくられる。山の幸、海の幸、鮮やかな錦糸卵。大村寿司に似た伝統料理を求めて植田さんご夫婦を訪ねた。

文、坂井恵子

四角い桶に広げられた甘めの酢飯。
この上に地元の具材が
盛り付けされていく。

自分を本物にしてくれるまち

～川崎公子さんが教えてくれたこと～

文、坂爪知奈津
text by Chinatsu Sakatsume

邦久庵

寄稿

大村湾を愛しむ茅葺きの庵を継いで

自然に対する感性を取り戻す、
建築家・池田武邦の
終の住処「邦久庵」

text by Masayoshi Nagano

文、永野真義

都市デザイナー・都市建築研究者。一九八六年大阪市生まれ。株式会社日本設計・建築設計群勤務を経て、現在、東京大学大学院都市デザイン研究室助教。二〇一六年より邦久庵に通い、有志と共に保全活用に取り組む。現在、一般社団法人邦久庵倶楽部代表理事。

真西を望む広縁（デッキ）にのみ
海外の木材を使用。
使われているボンゴシ（西アフリカ）の木は、
水に沈み、アイアンウッド（鉄木）とも呼ばれる。